

服飾雑誌『装苑』にみるアメリカ服飾流行の表象の変容

—1930～1950年代を中心に—

The Study of Assimilation of American Fashion in “SO-EN”:

From the 1930s to the 1950s

田中 里尚

Norinao Tanaka

要旨

戦中・戦後期におけるアメリカ文化受容の様相について、服飾雑誌『装苑』という史料を軸にして、その表象の変容を追った。1936年創刊の『装苑』は、太平洋戦争が始まるまでの間、アメリカの服飾流行を好ましく思い、その「合理性」や「経済性」について、パリ・モードよりも高く評価していた。戦争が泥沼化する中でアメリカの服飾流行は否定されていくが、論者の中には一定の評価を与えるものもあった。戦後において、『装苑』は、論説内においてはアメリカ服飾流行に対して一定の距離を置くが、グラビア表現はアメリカンスタイルそのものであり、論説と画像の方向が乖離していた。1949年ごろから、それらの乖離を埋める努力が始まったが、洋裁教育自体がパリを向きつつあったため、アメリカ服飾流行の意味づけで議論となった。1952年には、「アメリカンスタイル論争」が開始され、アメリカ服飾流行への批判が強まった。その結果、アメリカ服飾流行は若者向きで、物質的な力を背景とした既製服製造に最も適合したスタイルとしてのみ描かれるようになった。したがって、日本の戦後において、アメリカ衣料が若者・既製服向けとされるに至った経緯は、服飾雑誌における表象の推移にも見て取ることができよう。

●キーワード：アメリカ服飾流行／表象／アメリカナイゼーション

はじめに

戦後日本がアメリカ合衆国から受けた文化的な影響は、占領期を基点とする「アメリカナイゼーション」論の中で議論されてきた¹⁾。多くのメディアが、アメリカ合衆国の理念（「アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ」）を媒介する役割を果たし、日常生活の目標を構築してきたことが明らかになっている。

服飾／ファッション雑誌もまた、「アメリカナイゼーション」の影響を少なからず受けてきたと考えられるが、それらに関して実証的に研究した論文は少ない²⁾。本論では、代表的な服飾／ファッション雑誌の一つであった『装苑』を取り上げて、『装苑』が「アメリカ」とどのように向き合ってきたのかという点に着眼し、単線かつ強力に見える文化の「アメリカナイゼーション」に対するメディアの表象経験の一端を再構成することとする。

『装苑』は1936年4月に創刊された文化服装学院の機関誌であり、創刊の目的は「服装の改善と、その普及」とされている³⁾。この時点では、洋裁技術の教育とそれ

を補助する実用的な情報のみが掲載されていたと考えられるが、一方で、創刊の辞の執筆者の杉本正幸は「衣服の目的」を「実用と装飾」の二つとし、「衣服の改善とは、この二つの目的にびったりあてはまるように合理化すること」と規定している。

「装飾」という目的の「合理化」とは何か。「元来、装飾方面からくる要求は、多種多様であり、且つ伝統や慣習も加わり、複雑極まりないものでもあって、容易に合理化は行われぬ」としながらも、「実用と装飾を兼ね備えて、着る人の品性と人格とを表し、身体美を發揚すると同時に、経済的である衣服を作り出すことである」ということが、「装飾」の目的とされている。

このように、『装苑』発刊の目的には、「装飾」における「要求」を満たすことも必要とされていた。そして、この「要求」に対応した情報が、海外流行の報道記事であった。

『装苑』の海外情報に関する先行研究には、高橋知子の論文⁴⁾がある。そこでは海外を「欧米」と表記しており、ヨーロッパ（主にフランス）とアメリカ合衆国の

区別はされていない。したがって、本論では、『装苑』誌上におけるアメリカ合衆国の服飾文化の解釈と表象の部分に注目し、どう「アメリカ」を媒介したのか、という視角で、以後の『装苑』誌上のアメリカ表象経験を追う。

この論文における「表象」という言葉の定義であるが、記述される側の実態に基づく記述ではなく、記述する側の思想が投影された解釈によって組織された言表、という意味として理解されたい。

1 戦時下におけるアメリカ服飾流行の経済的合理性の強調

『装苑』創刊号の、海外への「窓」は「フランス便り」と「アメリカ便り」の2つだった。フランスはパリ、アメリカはニューヨークの流行情報を中心に記述している。ただ、それぞれに対し直接報道ルートを持っていたわけではなかった。すなわち、パリの情報はアメリカのメディアを経由して入手していたのである。

「いったい日本の『流行』はこれからどうなるのだろう。心ある人達はみなそれを心配している。映画が這入って来なくなる。ファッション・ブックが這入って来なくなる」⁵⁾ という嘆きや「ヴォーグ誌は常に世界最大の流行中心地を見、且つ研究しつつあるがゆえに、「ヴォーグ誌の正確なる服飾知識、見事な流行取捨の把握」があるので、「今シーズンのヴォーグ誌の流行、デザイン眼を御利用下さい」⁶⁾ という言葉に見られるように、『Vogue』や『McCall's』⁷⁾ などの各種雑誌とハリウッドを中心として配給される映画が、『装苑』においても流行情報の発信源だったといえる。

創刊当初は、写真等の転載によって視覚的な情報を与えるだけだったアメリカ服飾流行に、翻訳による論説が加わった。例えば、「洋装は自己を見詰めよ」(1936-12)というエッセイだが、書き手は『Vogue Pattern』の主筆の「ヘレン・ヴァレンティン」⁸⁾ である。この翻訳に携わった館林一也は、「アメリカ便り」の担当者として、『Vogue』掲載の流行分析を翻訳し、情報の直接性を高めた。しかし、そのために「アメリカ便り」と題されながらも、パリの流行が分析されているという奇妙なねじれが生じている。つまり、創刊からしばらくは、海外情報の発信源はパリ流行のアメリカ解釈となっていたのである。

アメリカとパリの区別は、「一流洋装店訪問記」(1937-3)に端的に現れた。インタビューの1人であるマダ

ム大津は記者から、各国ごとに好みは異なるのかという質問を受け、「アメリカ人はピツと強い感じのもの、柔らかい色はあまりうつもりません。フランス人は柔い色で変わったデザインのもの。イギリス人はアメリカ人や、フランス人に比べて好みはずっと野暮です。ドイツ人は大体に於て流行を追いません」と述べている。ただ、このようにアメリカとパリを区別する視点は特別なもので、一般的にはパリ流行のアメリカ解釈を欧米流行情報としてみなす意識が一般的だったといえよう。

こうした区別の中で、館林一也は健筆をふるっている。「春の流行大観」(1937-4)として、ヴァレンティンのエッセイを引用しつつ、「非常時の我が国に於いても庶政節約、嫁入り衣裳改善、結婚の合理化が叫ばれる折りから、注意に値する言葉」として評価している。館林は、服飾流行におけるアメリカ性を明確に規定しているわけではないが、合理的かつ経済的な目的に適合する特性を評価している。それを象徴する記事として「米国のカレッジ・ライフと服装」(1937-9)がある。この記事は戦前のティーンファッションの紹介として貴重だが、ここで館林は「スタンフォード女子大生」に関する『McCall's』誌の記事を紹介しつつ、アメリカの学生気質を日本と比較して論じている。

注目すべきは、若い人がファッションに関心を持つという特性とはアメリカ的なものだ、という指摘である。それは、「ドロシー・エドガース」による「一九三七—一九三八年の流行」(1937-10)という記事の「流行はフランスでなければ本格的でない、アメリカ好みはどうかと申す方もありますが、日本では主に若い方々が洋装なさるのですから、勢いアメリカ好みになります」という認識と共通である。

この認識は、エドガースのみならず文化服装学院の中心的教員であった森岩謙一も共有していた。事実、「デザイン修業十ヶ条(其ノ二)」(1937-2)では、「米国ではこの若い娘又は女学生をかなり重要視して、カレッジファッションとして特別に取り扱うような傾向も見えて居る。日本でも現在洋装をする婦人は此の程度の年齢が大部分である」と書いている。「若さ」はアメリカ服飾流行を集約するキーワードだったのである。

1937年間には、戦局の影響が記事に波及した。アメリカ服飾文化の理念や流行の媒介者としての役割を担っていた館林一也すら「非常時文化輸入統制と流行に就いて」(1937-10)の中で、自己批判ともとれる文章を書き、執筆陣の中から姿を消してゆく。

とはいえ、すぐに服飾流行情報が誌面から除外されたわけではなかった。「温かい衣裳選びに 冬も亦楽し アメリカのスタイルを拾う」(1937-12)では、館林に変わり南彌生がアメリカの流行情報を紹介している。そして、同号の「編集後記」では「けだし洋服は世界的なものです。世界の流行主調に取って逆らう必要はなく、世界も亦日本の国情とともに動くようになっているのですから、広い意味で、やはり欧米の流行界を知る必要は充分にあり、特にそれは我々専門家の任務でもあると思いますから、外国の流行紹介は遠慮いたしません」と、戦時即流行の否定という発想を否定した。

1938年間は、伊東茂平のような著名な「洋裁家」が「時局下に処する洋裁家の覚悟」(1938-1)を述べなくてはならない状況になってくる。そのような状況下で、アメリカ流行情報の媒介者として誌面に登場するのが先にも述べたドロシー・エドガース⁹⁾であった。

エドガースは、「昼のきものが進歩する 従ってテイラードなものが多い」(1938-1)の中で「昼のきもの、殊にスポーツ味を持ったものは、フランスよりもむしろ米国のデザインが優れていることは、流行の源泉地たるパリでも認めているところです。日本の洋装がアメリカ風だといって非難する方もありますが、昼は優美なフランス式のものより、活気あるアメリカ式になるのは当然のこと」と言い切り、アメリカ服飾の持つ「活気」を強調した。彼女は、自らの出身地であるアメリカ合衆国の服飾の特性を、ヨーロッパから「活気」の有無という点で切り離したのである。

エドガースは、アメリカ服飾流行の傾向の中に含まれる特性を、時局下における「軍国調」の中でも移植しうる形で提示した。その論理は、読者にも受け入れられた。彼女は日本の状況を考慮し「殊に只今のような時局下にあっては、フランスやアメリカのものをそのまま受入れる訳にも行かず、とって世界の潮流にも合せて行きたいものだと思います。幸に軍国調の快活な感じのものが全世界共通の流行になっている点、非常に楽なところ」¹⁰⁾と述べている。

とはいえ『装苑』の目次に流行情報が掲載されることは控えられてしまう。その中で、川崎英子は「夏のコートとジャケット」(1938-8)において「ヴォーグ」誌に掲載されたとおぼしき「通勤用夏の服装は」という記事に注目し、「通勤用」を「吾々日本人」と置き換え、仕事や食事や余暇をすべて同一の洋装で賄うアメリカ人都市居住者の生活が日本の洋装生活に適用

できる、と述べている。ここで強調されているのは、「アメリカ人都市居住者」における様々な場面を「同一の洋装で賄う」服装的経済性である。

このように、生活の中から「奢侈」や「華美」、そして「お洒落」や「流行」が排除されていく中で「流行」情報を報道するには、アメリカ服飾の特性のうち戦時生活に適合する合理性の部分のみを強調するよりほかなくなってしまうのであった。

そのため、エドガースは流行情報媒介者として、厳しい立場に立たされた。しかし、誌面から除外されるということではなく、時局下における服装を論じた座談会である「今後の日本婦人の服装を如何に指導すべきか」(1938-9)に藤田嗣治や原田茂らと並んで参加している。そこでエドガースは「物資節約の時代」こそ「大きな収穫を得る」ときだと述べ、そのためには「経済性」が重要であり、「流行を超越して或る特別な理由で愛用し続けられて来たものを拾い上げて、それを基本にしてデザインする」ことを主張した。

以後、エドガースは定期的に流行情報や技術を提供するものの、その源泉としてのアメリカ服飾流行に関する特性に言及することを避けるようになっていく。しかし、彼女の情報の参照元はアメリカ服飾界の流行であったに違いない。アメリカ服飾流行と繋がり深いエドガースを、『装苑』は起用しつづけたのである。読者もまた海外の最新情報を希望していたのだろうが、「1939年好みの色彩の使い方」(1939-2)や「春の洋装一揃え」(1939-3)等、巻頭に近い場所に流行指南の記事を配置しさえした。このことは、それら流行情報が、時局下の建前とは別に、読者に必要とされていたことを傍証している。

エドガースは、1939年初頭から文化服装学院の講師をつとめるようになり、4月以降は、学院での講演の「速記録」が掲載されるようになる。海外情報の媒介者ではなく、学内の教育者が海外情報について一部披露するという形なら、当局の監視をかわしやすかったのではなかろうか。ただ、アメリカ服飾流行の特性を意味づけるような文章は書かれていない。時折、「初夏に踊る流行の解説」(1939-7)を『McCall』誌の情報を元に行っているが、イレギュラーなものにすぎなかった。

「米国服飾界の流行を覗く」(1939-12)で、久々に「米国服飾界」という言葉が使われた。そこでは「アメリカの新しい流行」が語られている。エドガースは「帽子」「色」「袖の形」「スカートの丈」「装飾品」などの多様な観点から流行の傾向を提示した後、「アメリカ人の

洋装」は「ドレスであるとかコートなどをかう」場合には「流行よりも寧ろ質、自分の体格と云ったようなものを主にし」て、「その一枚のドレスに対して付属品を尖端的に使って、そのシーズンシーズンのモードに見せて着ると云うやり方」を行う、と書いている。

その一方、「日本では是と反対で靴や帽子は少し平凡でも、洋服の形だけ尖端的モードを着ると云う洋装の方が多く目につくのだが、それは「流行を追う洋装をする場合でしたら結局損」として、「付属品に新し味を見せると云うアメリカのやり方も、或は参考になるのぢやないか」と述べている。ここでも、彼女はアメリカ人のもつ服飾への経済的合理性を強調した。

この講演以降、エドガースは『装苑』上でふたたび精力的に流行を語ることになる。彼女は流行の紹介を行いながら、日本の服飾デザインの自立を促すような示唆を投げかける。そして、それらの根拠として、自らが過ごした青年期のアメリカの生活を引き合いに出している。「経済的な洋装をするには持ち物を活かすことが肝要」(1940-10)では、「一番経済的に而もスマートに洋装するコツ」として、「アメリカは職業婦人の多い所だけに、一定した収入の中から予算を立て」ることが肝要であると述べ、自分が「アメリカの大学の家政科に入った時、衣類のところ自分の持ち物全部を調べて来るようにと云う宿題を出され」た経験を示しつつ、アメリカ服飾流行に内在する合理性を改めて強調している。

アメリカ服飾流行の持つ「快活さ」というイメージから経済的合理性という特性に、エドガース自身のアメリカ表象の論点が移行するのは、戦時体制が強いた力による。逆に言えば、戦時体制だからこそアメリカの経済的合理性が強調され、その論理がアメリカ服飾流行の表象を規定していったとも言えよう。

孤軍奮闘していたエドガースも、1940年11月16日に「今般米国政府の婦女子引揚命令に接し、遂に本国へ引揚げる事となり、「国際汽船きよすみ丸で帰米の途」についたと、「洋裁界消息」¹¹⁾の中で語られた。しかし、彼女の講演録は『装苑』の1941年2月号まで掲載され続けている。エドガースの提供する情報が読者の期待に適合していたからであろう。

ついに、1941-11月号で『装苑』『手芸と洋裁』『服装文化』の3誌は「監督官庁の依命」で統合され、『服装文化』として生まれ変わることが表明される。その目的は、同様に「服装文化の向上」であり、具体的には「洋服依存から脱却すると共に退嬰的な非活動的な和服を改

めて、東西両洋の長と秀とを採り渾化融合した真に我が国情に適応合致する服装に改新する」こととされた。なぜなら「国民の服装の如何は一国の盛衰にも係わる重要性」を持つものだからである。この目的から記事が編集されたことで、必然的に流行情報は排除されることとなった。加えて、長らく参照元として誌面に登場していたアメリカ合衆国は、負の比較対象として描かれるようになっていく。

例えば、「私のきもの」の観念(『服装文化』1942-4)を書いた厚生省生活課の佐竹武美は「如何にきれいなきものが好きだと云っても、国家が弾丸を造るのを控えてきれいなきものを織って上げます等とは、アメリカあたりならいざ知らず日本では考えられない」とあてこすりを述べている。さらに、「最近某高等女学校教諭」が国民服について自分のところに批判を述べに来たという経験を示し、彼女が国民服でニューヨークに行ったら「こんなみすばらしいものをとすごい見暮で叱られた」と自分に告げたとし、彼女の発言の背後にある主体性の欠如した懦弱な精神を批判している。こうした事実が本当にあったかという問題はさておき、アメリカを負の比較対象として表象し、その模倣をも批判する言表が現れたことに注目しておきたい。

官吏によるアメリカ批判は、佐竹の文章に端的にみられるように、繰り返しアメリカの精神性の劣位を説き、それを模倣する日本人の精神批判に終始している。それに対して、女子教育に従事する東京女子医学専門学校長の吉岡弥生は、佐竹のような定型的な批判はできなかった。吉岡のエッセイ「次代を負う若き女性に望む(一)」(1943-2)では、以下のように述べられている。

「先達て交換船で帰って来られた人の話によりますと、イギリスでもアメリカでも、男子は勿論のこと婦人の緊張ぶりは非常なものである。アメリカのあの贅沢で驕慢な婦人達でさえ、自動車にも乗らない、絹の靴下も穿かない、そうして服装はみなユニホーム…戦争に勝たなければならないというので、いろいろな団体が結成された。…(中略)…それなのに日本に帰ってみると、戦争をしているのはどこの国かというような男や女が、およそ戦時下にふさわしくない身なりをして如何にも享楽気分で以て銀座あたりをぶらついて居る。どうしてそのように認識が無いのだろうかということを言われるのであります」¹²⁾

吉岡は、アメリカの女性の精神性を頭から否定するのではなく、「とにかくアメリカの婦人には教養があります」と述べたり、「銃後は婦人の手で立派にやっけて行かれる、是がアメリカの強味」と述べたりして、最終的にはアメリカを否定せざるを得ないものの、学ぶべき点を冷静に指摘している。John W. Dower は二国間の総力戦状況が、偏見の言説=ディスクールを書き手に強いると指摘している¹³⁾が、ファッション言説の領域においては、とりわけ女性に多いのだが、アメリカ服飾に学んだ記憶が、偏見を書きにくくさせていた。ただ、1943年内をもって、『服装文化』は廃刊してしまう。この情報カテゴリー全体が、すでに総力戦の遂行にとって不要となるまでに経済状況は悪化していたからである。

戦前の『装苑』は、フランスのパリとアメリカ合衆国を流行の源泉の双璧とみなし、その摂取に努めた。加えて、アメリカの流行をヨーロッパの流行から切り離し、その特性を戦時体制下において表象したのである。そして、戦火が強まっても、アメリカの経済的合理性から学ぶことは放棄しえなかったのである。すなわち、ドロシー・エドガースによるアメリカ服飾の経済的合理性は、太平洋戦争の半ばまでは正統性を維持していたのである。彼女が抽出したアメリカの表象としての経済的合理性は、実のところ『装苑』にも、日本にも必要なものだったからである。

しかし、対米戦争の状況が悪化してくると、アメリカの精神性全体を批判・否定する書き方が大勢を占める。それでも、今までのアメリカから学んできた記憶を否定しきれない執筆者は、アメリカ服飾流行の痕跡を示すようなエッセイを書いた。この記憶は、戦後にふたたび想起されることとなった。次節で、その展開を述べていくこととしたい。

2 占領期のアメリカ服飾流行の表象

戦後の復刊は1946年の7月号より始まった。巻頭のスタイル画を紹介するページには、早くも「アメリカ流行スケッチ(ツーピース)」¹⁴⁾が登場した。鮫島佐保子による「肩幅を、ゆったりと広く ウエストを、きゅうと、しぼる」デザイン画のシルエットは、いわゆる「ニュールック」風の流行¹⁵⁾を彷彿とさせるが、その言葉はまだ用いられてはいない。

文章の次元に目を転じると、『装苑』はすぐにアメリカ風の流行を最新のものとして紹介することを是としなかった。『装苑』(1946-8)で、遠藤政次郎は、現在「日

本で出版されるスタイルブックを見」ると、「アメリカの流行の紹介があまりに多い」ように感じると述べ、「戦争前と違って完全に優者となったアメリカの模倣に奔ることは当然」ではあるが、「併し勝った者、持てる者の真似は事実上負けた無い者には出来」ないし、「アメリカで善いことでも日本では悪いことは沢山」ある、と無自覚なアメリカ服飾流行の追従に苦言を呈している。

服飾流行と衣生活の本質をどのようにバランスよく情報として構成していくかという問題が、『装苑』の戦後再出発の課題であった。したがって、アメリカ発の流行情報に関しても、両義的な態度を取らざるを得なかったのである。読者がアメリカの服飾流行情報を求めていることは知っているが、それをそのまま掲載することはできないという、分裂的な状況におかれたのである。

一方、「マ元帥 年頭の言葉 世界が見守る日本の将来」(1947-1)という文章が掲載され、情報がGHQの検閲の上で、読者に届けられていることが仄めかされている。そのため、アメリカないしヨーロッパの存在を無視したまま、日本独自の服飾美の創造を語ることは不自然でもあった。事実、遠藤は「各自が製図して裁」つ「面倒」を指摘し、「欧米と劣らぬほど洋服の着用者の増した今日服の作り方も欧米先進国に倣うべき」と述べ、ドロシー・エドガース、「メーソン夫人」「ラチーマー夫人」たちからも教示を受けていることを示唆している¹⁶⁾。

ちなみに、「製図して裁断」する方法と、既成の型紙を用いる方法のどちらを採用するか、という技術的問題は、1947年時点での『装苑』の技術教育上の焦点でもあった。この問題を解決する際に、アメリカ式の方法が参照された。例えば、牛込ちえによる「これからの洋裁研究」(1947-7)では、「私がアメリカで修めたのは高等学校の教員を養成する学校でしたが、そのパタスタディと云う科をとりました所市販の型紙を研究して、それでストリートドレスを作」った経験が示され、アメリカ式を肯定的に選択している。『装苑』は、論説上は、欧米追従を警戒しつつも、技術的側面においては、少なくともアメリカの方法を参照していたのだといえる。

では、流行記事はどうだっただろうか。8月号には「ニューヨークだより」(1947-8)という5分の3ページほどの記事が現れた¹⁷⁾。この情報は、ニューズウィークの1947年6月23日付の記事の全文翻訳であり、アメリカの最新流行として「アワーグラスシルエット」が紹介されている。月をまたいで10月号にも分載され、完結している。しかし、1947年次においては、流行を報

道しようとする記事は、この程度にとどまった。

この段階において、教育上のアドバイザーとして欧米人の女性を擁しつつも、流行報道に関しては慎重な態度をとらざるを得なかったのは、なぜなのか。それは、戦時体制下において遠藤がアメリカ批判の論陣を張ってしまったことにあるのではないか¹⁸⁾。そもそも文化服装学院を設立した並木伊三郎は、シンガーミシンのセールスを経て裁縫女学校を設立している。すなわち、アメリカの精神に親和的だったとさえいえる。そのことが、フランスの流行よりもアメリカの流行を戦争直前まで掲載し続けた理由でもあったのだろう。並木の出発点を否定し、時局の中でアメリカ批判の言論を展開した経験を、戦後すぐに翻すことははばかれたのではないか。だからこそ、戦中において結晶した日本独自の服飾美の創造という目標を、戦後も持続しつづけたのである。

それにも関わらず、流行情報は1948年間には誌面上での印象を強めている。スタイルブックの図像としてのみ表現されてきた流行とアメリカが、目次に言葉として登場するようになる。例えば、宇田川精一の「アメリカの流行を垣間見て」¹⁹⁾では「戦後世界に於ける服飾流行の中心地はパリからニューヨークへ移ったと謂うことが出来る」と断言している。2月号では宇田川による「映画の生み出す流行」や長谷川路可による「ニューヨークのアウトライン」²⁰⁾が連続して掲載されている。もちろん、ただ言葉が増えたというだけではなく、宇田川も長谷川も『装苑』のみならず文化服装学院の重職を担っており、権威を有していた。権威である彼らの言葉を通すことで、流行の無自覚な模倣に対して、『装苑』は読者に歯止めをかけたのである。アメリカ流行を無自覚に追従することへの批判から、識者の認識を共有することで自覚的に流行を摂取することを肯定していくようになった。

流行への追従と日本独自の服飾の創造という二者択一は、『装苑』に登場する執筆陣たちの頭を悩ませていた。流行を報道しながら日本独自の服飾美を追求するという二つの志向を統合する論理が見出せなかったからである。例えば、『装苑』(1948-5)で今和次郎は「模倣だけではどうかという事がアメリカ婦人達によっても指摘されている」と述べた。『装苑』の目次の量からだけでは、どれくらいアメリカンスタイルが模倣されていたのか、という問題に対する明快な解答は得られないが、スタイルブックページの部分は袖などにバリエーションはあるものの、基本的に「ニュールック」といえる。画像上で

は、アメリカへの言及なく、流行が展開されていたのである。

一方で、模倣熱を押しとどめようとする言論も多く掲載されていた。宇田川精一も『装苑』(1948-6)の「流行について」上で、流行の源泉がアメリカに移ってきている状況を説明しつつ、そのような流行に対処するアメリカの精神性を強調している。すなわち流行は、「その国の国力、経済力、文化、歴史、風俗、習慣という総合的な勢力から発生」と述べ、このような「優越」した国力を持つアメリカの「今日の繁栄を来たらしめたもの」として「キリスト教精神」の存在が重要だという。したがって、物質文明だけを「羨望」し「模倣」するのではなく、「真に日本的な即ち我国の国情や、風俗、習慣にしっかりと調和し、而も深い知性と優美な洗練された良識に基いた婦人服の流行」こそが必要であり、その「意味においてこそ、アメリカの流行の研究」必要であると主張したのである。

『装苑』(1948-8)で「座談会・最近の外国服装界はどう動いているか」が開催された。参加者は読売ウィークリー編集長・古田徳次郎とその夫人、長谷川路可、原田茂、野口益栄の5人だ。「外国」とはいえ、実際に訪れたのはアルゼンチンとアメリカの2国だけなのだが、古田夫妻が訪れた経験をもとに座談が進んで行く。実質、アメリカ服装界の動向が語られている。

流行に関して、流行に無自覚に追従するのはよくないが、流行を学びつつそれを独自性創造に生かす道がある、という宇田川に代表される主張は、『装苑』内の流行記事の掲載に対する根拠として機能した。その基礎づけのもとに、流行に関してフランスとアメリカのどちらを採用すべきか、という問題も生まれてきた。例えば、『装苑』(1948-10)の「服装を生かす色彩について」の中で、中原淳一は、その二者択一に対して、フランスは「耽美主義」で「くずれそうな美しさ」も含んでいる一方、アメリカは「生活的で機能的」とし、現在の日本の状況を鑑みると「アメリカ的に美を求めた方が健康で建設的」ではないかという提言をしている。

『装苑』(1948-11)では富田英三による「流行教室 モードのテエマを掴む」が掲載された。この記事では、流行の入手源を日比谷にある「GHQの図書館」とし、その一隅にある「ファッション・センタア」という一室を「アメリカン・モオドの直輸入場」と記述している。そこには「アメリカ舶載のヴォーグ、マッコールのパターンブックから、ハアパラス・バザー、マドモアゼル

などの近着流行雑誌の絵姿ブック」があり、それに多くの「洋裁ガールとレディが雲集」していると述べていた。洋裁を志す読者は、アメリカ流行の摂取に勤んでいる状況が見て取れる。この状況を富田は限定つきで肯定している。少なくとも「流行は抗し難い美意識進歩であり、女性の本能に結合した生活運動なのである」とし、「オリジナリティ」を持たないことだけを批判している。

このように、1946年から48年にかけて、流行情報どのように肯定するか、掲載の正統性を提示するかということが『装苑』の流行報道における主眼だったのだといえる。

しかし、これが急展開するのが1949年次のことであった。『装苑』(1949-1)の「年頭の辞」において、今まで日本独自の服装美の創出を論じていた遠藤は、「皆さんの御希望を容れ」以下のように誌面を「刷新改善」と述べた。

「一、アメリカの服装界の情報を連載すること

一、アメリカの来るべきファッションスタイルを紹介すること〔ママ〕

一、アメリカの手芸を紹介

一、ヨーロッパの服装界の情報を紹介

一、表紙を原色の実物写真とする事

一、広告のスペースを減らし内容を盛る事」²¹⁾

(筆者：注記は省略した)

「以上の計画に依れば、従来外国の流行紹介に対して比較的消極的であった本誌は、今後積極的性質を帯び」とし、「本誌の方針は時勢の推移によるもので」あるが、「目的」は「我国の服装文化の向上にあることは不動」とも述べられる。さらに「そこで世界中最も文化の高いアメリカの服装を範として我々の服装文化を高める必要が生じた」とし、ヨーロッパに対するアメリカの優位性を強調している。

『装苑』(1949-2)のグラビアページには「あちらのニュールックから」と題された写真が6体表示されており、方針転換の象徴となった。もちろん「アメリカの」とは言わずに「あちらの」と述べている部分は『装苑』の表現上の含差でもある。加えて、同号に掲載された「被服研究家」三徳四水による「流行の研究」は、そのような「時勢の推移」に対して『装苑』の抵抗感を形としたものである。流行を参照項にするだけでなく、考

察の対象として提示することで、一定の客観性を保とうとする意志を代弁している。

見物談、報告談も増えていく。例えば、『装苑』(1949-3)では「アメリカ婦朝談 服装百態」というエッセイを「繊維貿易公団絹人絹部長」の飯島秀尾が書いている。このエッセイは、旅行者のアメリカ流行観察記だが、先の古田夫妻のレポート以上に、流行源としてのアメリカを強調している。

アメリカ服飾流行をめぐる連載も開始された。それは「オハイオ州オックスフォード市」にいる「本誌特派員」の池田弘子による「アメリカ便り」である。池田は元々「民俗学研究所所員」として「御活躍」していたが、1948年10月に「社会学及び民俗学研究所の為渡米」したという。『装苑』は、そんな池田に依頼して、「服装に関するニュースを次々に」送ってもらうこととなり、海外の直接見聞をよりリアルタイムに伝達するチャンネルを構築した。もちろん、池田の記事は、単に流行情報だけが主題ではなかった²²⁾。この号では「ファッションショー」とその「プログラム」に注目していた。

今までのように、論説で批判しつつもアメリカの流行の視覚的情報(グラビア)²³⁾を掲載するという分裂したあり方ではなく、アメリカ服飾流行の実態を立体的に描き出し、意味づけようとする試みが、再度開始された。

この意味づけは、日本人の書き手だけでは完結しなかった。『装苑』(1949-9)では、「シルビヤ・クレーン」による「米婦人の見た日本女性の服装」というアメリカ人女性が直接教を語る記事も増えて行く²⁴⁾。1949年間の『装苑』は、アメリカ服飾流行を画像の次元と言説の次元の2側面を関連させて表象していったのである。すなわち、流行の摂取には知的な認識が必要という信念から、グラビアを補完する言論が登場したのである。

一方、流行のもう一つの震源地であったパリはどうか。

そのパリが再び参入するのが、1950年次であった。『装苑』(1950-1)の「年頭の御挨拶」で遠藤政次郎は「さて、文化は比較の上に進歩します。この意味から本誌は昨年パリのE・P・S会社と独占契約を結んでヨーロッパ最新のモードを御紹介」と報告している。

この時点で、戦前の水準まで海外情報の経路が回復した。誌面の復興も、社会と相即的に進行していたのだ。さらに、座談会や対談の記事にも、男性の識者だけではなく、女性が登場し、個性や流行、そして好みについて多彩に語るようになった。

パリの流行とアメリカの流行が併記される中、『装苑』(1950-3)には、戦前に執筆者として孤軍奮闘したドロシー・エドガースが誌面に登場する。対談記事「若い人のために『日本人の服装のあり方』」の中で近藤百合子と語り合っている。情報併記は、それぞれの国の服飾文化の差異を表象する必要性を生じさせる。

そのため、アメリカ服飾文化内の差異を細かく記述する記事群が現れる。例えば、「シルビア・クレーンさんを訪ねて」というグラビア記事や、クレーンによる「アメリカのハイスクールガールズとその服装」や「アメリカ流行紹介 学生靴のファッション」や、清水晶による「ハリウッドのベスト・ドレッサー」、「アメリカン・カレッジ・スタイル」「服装の勉強になる二つの色彩映画『イースターパレード』と『赤い靴』」などが挙げられる²⁵⁾。『装苑』(1950-4)でも「アメリカン・スクール」というスナップ写真を通じて、中目黒のアメリカン・スクールの服装を示しさえしている。

こうした記事群の中で特徴的なものは、若さへの接近である。「カレッジ・ガール好み」では「アメリカのカレッジガールは、何か変わった思いつきを常に工夫しています。それは突飛などというよりは実用の裏付けをもつ『おもいつき』」であり、「勿論このまま現状の日本の女学生に相応しいものとしてお勧め出来る訳ではありませんが『明るさ』は、ほしいと思います」というように、アメリカ服飾文化に内在する「若さ」という特性を強調している。

パリとアメリカという流行の源泉の双璧は、1950年次においては、次のように整理されている。フランスは、センスを持つ大人向け。アメリカは若々しい女学生向け²⁶⁾。女学生に関しては先のクレーンを参照するとして、パリに関しては、島村フサノによる「フランス婦人の服装について」(1950-4)が、パリ流行の特性を特徴的に表象している。

島村は「フランス人のモードに対する観念は、吾々の想像以上に厳粛なもので、フランス婦人の古い伝統によって養われた微細な感覚は地味な中にも洗練された清純な美しさを特にその生活の中に取り入れる事に、細心の注意を払っている様」だと述べる。パリ女性が「モードから自分達の個性に上手にマッチする或るもの見出す」力を持つという表現は、対照的に「現在日本にいらっしやるアメリカの御婦人の衣生活を見て、フランスの一般婦人より遥かに衣生活にダイナミックな興味を持ち多くの衣服を持っていらっしやる事」を感じるという

ように、少ない衣服を個性的に着る力はフランスの方が優れ、かつ、それを日本人女性が今後身につけて行かなければいけない、という主張として現れた。すなわち、着回しと個性はパリ、既製服と物質がアメリカという差異が作られているのである。この差異は、戦中において経済的合理性がアメリカの特性として強調されたこととは異なる描かれ方である。だからこそ、これらの記述は、表象として理解できるのである。

いわば、1950年次はパリとアメリカの差異が先鋭化した時期であった。島村のような差異が提示される中、フランスの「シュザンヌ・テリー」などは日本に「1949年の3ヶ月」間滞在した際「これはアメリカ婦人の服装が相当に影響している」と思い、「半分は悪い影響を受け」と断定した。テリーは「アメリカ婦人の体格と、日本婦人の体格が全く異なっている」のに模倣しているので「着こなしがアメリカ婦人よりも劣って」いて、かつ「アメリカ婦人はフランス婦人と並べる場合、着こなしの点に於てはまだフランス婦人に及ばない」から「私はむしろフランスの流行に盲従して欲しい、その方がいくらか無難であると考えた」とすら述べている²⁷⁾。

1950年以降の『装苑』は以前に比べ、ページ数が格段に増加した²⁸⁾。これは、復興が途につき紙の生産量が増加したためだと考えられるが、記事のカテゴリーも、単なる女性の外出着だけではなく「ホーム・ドレス」や通勤着、水着といった生活場面にあわせた着こなしも提示されるようになった。また、子供服、学生服、男性服など年齢・性別による細分化もはじまった。その中で、子供服や学生服に対して、アメリカの服装が参照され、優美な大人の女性を表現する服としてはパリ・モードを参照するような棲み分けが行われ始めるのであった。

このような記事群の細分化は、以前からの読者の混乱を招くおそれとして編集部に理解されたのだろうか。1951年次には目次が整理され、グラビア群、「記事」群、「技術」群としてカテゴリー名が明示されるようになったのである。

さて、1951年次は『装苑』の編集部にとっても、画期となる年となった。この年の8月に、今まで顧問としてのみ関わっていた今井田勲が、正式に編集長として着任したのである。今井田は、記事を概括的に4つのカテゴリーに分けた。それは「グラビアと口絵」「教養記事」「技術記事」「その他」である。この4つのカテゴリーを軸にして、特集を定期的に挿入するという編集方針をとった。

翻って、このカテゴリー整理は当時の読者の関心の方向性も明らかにした。技術を学びたい、流行情報を視覚的に手に入れたい、服飾の世界に関して知りたいという三つの読書傾向が読者の大多数の中で交差していたのではないか²⁹⁾。「技術」カテゴリーは、従来の『装苑』の目的に最も適合している。しかし、そこでは、技術伝達のための効率性が最大化されたため、純粋で簡潔丁寧な技術伝達が目指された。それゆえ、服飾世界の記述や考察、意味の開示といった機能は、全て「教養記事」に移された。「グラビアと口絵」は、その中間にある。写真による完成図の提供という目的と、服飾の持つ美的表現の世界観の開示という目的とが、融合されているからである。読者は、それぞれを自らの読書目的に応じて読み取っていったのだろう。

1951年次以降も、引き続いてアメリカ服飾文化の表象が行われる。『装苑』(1951-2)の青木英夫「アメリカの学生と服装」や『装苑』(1951-4)の「アメリカの合理化生活について」座談会、『装苑』(1951-5)の田中千代「アメリカ生活から学ぶもの」、『装苑』(1951-7)の井上靖「アメリカ文化」、『装苑』(1951-9)の田中千代「私のアメリカ土産」、『装苑』(1951-12)「ハリウッドの名デザイナー ディーンさんドレス訪問」など、目次でもはっきりと強調されている。

占領期におけるアメリカ服飾文化の表象は、抵抗から知的な摂取、そして、パリとの特徴的差異の明示による若者ファッションの流行の源泉として、移り変わっていくこととなった。その中で、アメリカの服飾流行は、若さや健康や既製服といった部分が強調されて、その表象が形作られるようになったのである。

3 復興期におけるアメリカ服飾流行の表象

アメリカ服飾文化に対する批判は、突如として始まった。『装苑』(1952-8)の篠原正瑛の「アメリカンスタイルはごめんです」という記事で、それは行われた。目次をみると、白抜きではっきりと他の記事と区別されており、意図が強く浮き出た記事となっている³⁰⁾。ただし、68ページに配置されており、全体で160ページほどの分量の、中間に位置している。しかし、この小さな記事が「アメリカンスタイル論争」を引き起こすのである。

この記事は、篠原が編集し、自らも書いた『僕らはごめんだ』(光文社 1952)という書籍の中から、「アメリカンスタイル」の項のみを抜き出した記事である。「ドイツ婦人」の「アンネローレ・クニットマイヤー」との

「三通の往復書簡」の形式で書かれた第一信では、日本の女性たちが「自主性」なく、アメリカンスタイルの模倣をしていることを嘆き、「あなた方、ドイツの若い女性たちも、やはり、アメリカの女性たちの流行を追いまわしたりしているのでしょうか？やはり、あなた方の間でも“アメリカンスタイル”という言葉は人気があるのでしょうか？」と篠原が問いかけている。それに対し、第二信でクニットマイヤーは、一般的に「ドイツ人は外国の盲目的な模倣」を嫌い、かつ現在のドイツの生活に適合しないような英米の流行よりも、伝統に裏打ちされた固有性を志向すると述べている。第三信で、この返信を受けた篠原は「ヨーロッパ的・民族的プライド」の必要性を再確認している。

全体として、この記事には「アメリカンスタイル」がなぜ拒否されねばならないのか、ということアメリカ服飾流行の実態に即した形で分析されていない。むしろ、ドイツ人女性の声を借りて、流行追随者を批判した論争の記事といえる。

この記事には、すぐに反響があった。翌月の『装苑』(1952-9)の「読者の声」の中でそれらが紹介されている。東京都新宿区在住の小林真佐江は「私たちの服装について強い批判と反省が与えられ、それによって「服装に対する見方がはっきり解り」、大変感謝していると述べた。この発言が、反応の代表的なものである。

読者の反応を受け、『装苑』(1952-10)では「アメリカンスタイルはごめんか」座談会が開かれた。出席者は、中原淳一、篠原正瑛、南部あき、野口益栄の4人だ。中原は、模倣といえるほどの模倣になっていないと訴え、「根本」の不在を訴える。それを受けて、司会者は篠原の述べる「アメリカンスタイル」とは「植民地的な服装だけ」を指すのか、それとも「アメリカのスタイル全部」を指すのか、を尋ねた。それに対して、篠原は「僕は服装のことはよくわからない」と前置きした上で、あの本の中で言いたかったのは「精神的なもの」であり、その目的は「再軍備反対、平和運動という点を打ち出したかった」と述べている。このように、議論がかみ合わないまま進む座談会であるが、出席者の一人でアメリカ流行の報道者として誌面にしばしば登場する南部あきは、アメリカ服飾流行の具体的な部分にまで下りて、発言している。

「たとえば、いま日本の女の人们たちにおすすりできる服といえば、シャツウエストドレスなんです。シャツウ

エストはフランスのディオールが世界中にはやらせたのですが、その本家本元はアメリカなんです。スーツがこんなに着られるようになったのも、アメリカが、スーツというものの合理性を教えてくれたからです。ですから私、アメリカンスタイルを真似するのは結構なことだと思います。」

以降、座談は模倣の不徹底と模倣対象の議論に移行する。中原と南部はアメリカ派、野口はフランス派であった。色彩をどう取り入れるかという主題について、中原は「アメリカの色彩になることが、日本の風景に近いことと思う」と述べる一方、野口は「パリの堅実なやり方を取り入れたい」と応じている。このあと、アメリカの衣服の取り入れ方について、中原と野口の間で激しいやり取り³¹⁾があり平行線をたどるが、アメリカの実際の服飾界に詳しい南部が、「昨年あたりスリーブレス」が流行したが、それは「普通のブラウスですとニヤールいるんですが、一ヤールででき、安く」あがるから流行したので、「結局経済的に合理化されるような流行は早くとり入れられる」とまとめている。最終的には、アメリカのこだわりのなさや経済的、合理的な側面をもっと学ぶべき、という趣旨で結論する。実際、篠原までもアメリカの厳しい勤労精神なども含めた上で「アメリカをもっと真似していい」とまで述べてさえいるのだ。

これらの論争は、戦中におけるアメリカ理解と、戦後におけるパリの理解が反転して一致してしまった結果だと、解釈できる。すなわち、中原や南部は、戦中において表象されたアメリカ服飾流行の合理性を擁護しているのに対して、野口は経済的に凋落したパリの戦後の感性を「堅実」として擁護しているのである。どちらも、経済的合理性を主張したいのであって、参照先をどちらにするかの論争とさえ言えるのであった。

とはいえ、論争はさらに続いた。そして、議論と並行するように「読者の声」には共感や反省の意見が寄せられた。その結果、『装苑』(1953-2)では「外国モードをどう取り入れるか」というグラビアの主題をみると、それらの議論が反映されていることは確かである。また、技術のページにも「アメリカの赤ちゃんの衣類はどうなっているのか」(1953-2)など、アメリカ服飾の実態に一步踏み込んだ記事も現れている。ここで重要なのは、アメリカは「物質の国」だとする記述である。すなわち、「赤ちゃんの衣類も身の回り品もすべて既製品で売っておりまして、種類も豊富なところは、さすが物質

の国」というように、生産の効率化による既製の王国として描かれている。戦前における経済的合理性の強調から、「物質の国」へ。第二次世界大戦の勝者となったことで生じたアメリカの経済的繁栄が、表象の次元に影響してきていることが見て取れるだろう。

『装苑』(1953-5)では、直接外国人識者の意見が集められ、論争は佳境に入った³²⁾。アメリカからは「バーバラ・ディーン」、ドイツからはクニツマイヤー、フランスからは「ラピエール」、日本からは石走貞子等5人読者代表団が参加した。とはいえ、直接ぶつかりあう座談会ではなく、書簡のやりとりを誌面に展開し、意見の違いを浮き上がらせるという形式をとっていた。

ここで注目すべきは、批判されている当の国の代表ディーンである。5人の意見に対して、ディーンは「アメリカン・スタイルを望まぬといわれるならば、一体アメリカン・スタイルとはどんなものでしょうか。わたしに教えてくだされば有難い」と、いわば命名の暴力について語り、フランス・モードが「アメリカでは徒労」に終わるのは、「高価過ぎ」かつ「実用的でな」いからだとも述べる。この解釈は、エドガースの戦中のアメリカ服飾流行の表象と一致している。

そして、アメリカには特定の伝統から生まれる衣服があるのではなく、「進歩と平和」を代表し、一種のグローバルデザインを表現しているのだから、「お互いに交流し」あつて「借り」あおうと、ディーンは呼びかけている。直接的に表現されてはいないが、こうした反論が描き出すのは、アメリカの衣服が全世界的に通用する合理性と経済性を併せ持っているという自負である。

最終的に、『装苑』(1953-6)の「読者の声」上において、論争の打ち切りが宣言された。しかし、この論争は誌面構成において強い影響を及ぼした。第一点、アメリカ以外の服飾伝統にも目を向けることになったこと。第二点、アメリカの服飾界や精神性に対して深く知らなければならないことを自覚したこと。第三点、パリとアメリカの違いを明確化したことである。

一方、『装苑』の編集方針の変化も、アメリカンスタイルを相対化する役割を果たした。従来の洋装の普及という目的をある段階まで果たすと、母体の文化服装学院はデザイナー教育に1951年前後を契機として、シフトしていくこととなる。それは1953年次には、目次等に明確に視覚化され、その方針に沿った記事が続々と生み出されていく³³⁾。その結果、目標とするデザイナーはパリを中心とした一群に焦点が当てられていくことと

なった。特に、1953年末のクリスチャン・ディオール・グループの来日³⁴⁾によって、その傾向が強化されていくことになった。すなわち、野口の発言に即して、パリのクチュールデザインの報道に焦点を定めていくこととなったのである。

そのため、アメリカ服飾流行の内部を直接語る人材は希少となった。バーバラ・ディーン、南部あきといった書き手が、それらの報告をするに過ぎなくなってしまったのである。このような戦後のパリと経済的合理性を表象の次元において争ったアメリカ服飾流行は、『装苑』上においては、既制服の分野のみにおいて注目されるようになっていく。

アメリカは「物質の国」であり、既制服分野に強く、若者のスタイルにおいて特徴的である、という表象は、ファッションデザインの個性と着こなしのシックさを代表するパリと区別されることになっていく。その結果、アメリカ発の流行は、『装苑』の中でかつての2大源泉の地位から滑り下りることとなった。その結果、アメリカ服飾流行の統一的表象もまた、誌面の中で変容していくこととなった。

以後アメリカの服飾界の情報は、南部あき（『装苑』(1954-10)「新着海外モード」）、富田英三（『装苑』(1954-10)「街頭スナップアメリカへ行く」、『装苑』(1955-2)「アメリカの流行と生活」）など、部分的に語られるだけになる。もちろん、ハワード・グリアの来日に関する一連の記事（『装苑』(1954-11)、『装苑』(1955-1)「グリア作品集」「グリアモデル大いに語る」）などによって、アメリカ服飾のデザインの報道が間欠的に生まれることはあったが、クチュールのパリと既制服のアメリカという表象の区分は揺らぐことはなかった。

その中で、『装苑』(1955-5)に「アメリカ派とフランス派のモードに関する往復書簡 日本人はどちらから多く学ぶべきか」という記事が掲載された。そこでは青木英夫と伴野伴三郎の書簡が掲載されている。青木は歴史を回顧して「講和条約が結ばれると同時にアメリカ調は次第に衰え」はじめ、「フランス調が、急速な勢いで若い人々の心を占めて」しまったと述べている。この転換は「政治思想面における反米主義に付随する」ものとし、しかし、「アメリカ・モードはフランス・モードよりもっと私たちの身近にあるような感じ」がすると述べている。「あくまで、プラグマティズム（実証主義ママ）から出発しているのがアメリカ文化の特色」であり、「できるだけ単価を安くあげて、誰もが着られる服をと

いう合理主義の考えが、アメリカ既制服を普及させている原動力だと規定する。この記述に見られるように、戦中のアメリカ服飾流行の特性としての経済的合理性の記憶は残っている。しかし、こうした発言は誌面で中心には来られず、既制服発展の特性の中に押し込められ、ファッションデザイン分野における特性とは見なされなくなってしまった。

伴野はフランスを「シック」で「芸術はだ」であり、そこをこそ学ぶべきと主張する。第三信で青木は服装は「実用芸術」だといい、「アメリカのモードは、完全に実用の美」をそなえている、と主張した。この論争は、先の座談会における中原や南部と原田との見解の相違とは異なり、戦前におけるパリとアメリカの表象同士が争っているといえるものだ。

『装苑』(1955-11)に6ページにわたって掲載された「フランス・アメリカ海外モード集」というグラビアは、11体のデザイン例を提示している。そのうち最初の見開きの3体は現実のデザイナーの作品であり、次の見開きはフランスの4体、最後の見開きにアメリカの4体となっている。アメリカの4体のうち3体について、「ジュニアらしくかわいいもの」であったり「若い人の冬の普段着にふさわしいデザイン」であったり「カレッジガール向きのコートドレス」とキャプションに明記されている。

この例からみられるのは、アメリカ服飾流行における「若さ」との相性の良さを強調する言表であろう。とりわけ、パリの流行は大人へ、アメリカの流行はティーンへと配分するような、記事の意図がみられる。評論家でもある石垣綾子の「行動的なアメリカの十代」というエッセイの中では、ファッションのことはほとんど触れていないけれども、石垣の経験をもとに、アメリカのティーンが描かれている。その特徴は、「健康な美しさ、ねばり強さ、積極性」と「不安な社会の波にゆすぶられてやけ気味となり、享乐的」なものとの間にあるとされる。これは、アメリカの持つ若さや快活さという特徴と、戦後日本において物質主義の国と規定した特徴との反映として理解してもよいのではなかろうか。

『装苑』(1956-2)ではデザイン教育を目的とした記事群の中で「実用本位のアメリカンファッション」というグラビアページが掲載された。そこでは、リード文に「パリ・モードは特定の人のためにデザインされ、アメリカのファッションは大眾のためにデザインされていると言われます」と書かれている。そして、「ここに紹介

するのは、合理性に基づき誰にでも似合う典型的なアメリカのデザインです」と述べられている。これもやはり、「合理性」を既製服分野における優位性として捉え、そこにのみフォーカスしていく表象として捉えられるだろう。

『装苑』(1956-4)からパリコレクション報道が始まった。それによって、「パリ・モード」とのつながりを深める『装苑』は、大衆性を持ち「誰にでも似合う」アメリカのスタイルを、より詳細に展開することはなくなった。もちろん、『装苑』(1956-6)から在ニューヨークの特派員である石丸寿代によって、アメリカのデザイナー紹介が行われることになるが、それは全体的なバランス配分に配慮した結果に過ぎず、パリとアメリカの記号的差異を覆すことはなかった。

このようにして、アメリカ服飾流行の居場所が誌面上において確定してしまったあとは、それを覆すような言表は出現せず、分量や注目度³⁵⁾自体も減っていくことになる。これは、パリコレクションが毎年特集されていたことと対比しても、事実だといえる。

その中で、アメリカ服飾流行のスポークスマンとして孤軍奮闘していたのが南部あきである。中原・南部-原田論争の中で、とりわけ南部は、アメリカ服飾流行の実情に即して、その本質を伝えることを本領としていたといえる。その南部による『装苑』(1958-2)の「流行語がかたるアメリカのファッション」は、アメリカ服飾流行の原動力となる消費者の核を「若い働く女性」とし、それゆえにアメリカでは有閑的な美しさではなく、「生活的な美しさ」が必要となっていると説明している。そのため、最近の流行語は「チャーム」から「グラマー」へと変貌しているが、この「グラマー」という言葉は、「正常で、健康的な魅力」であり「ティーン・エイジャーやカレッジ・ガールの魅力を表現する場合にも」この言葉が多用されると述べられる。南部による、説得力のあるアメリカ服飾流行の表象を決定打として、アメリカ服飾流行は、1950年代後半には、「物質の国」が生んだ合理的かつ経済的スタイルであり、そうであるからこそ、経済力に余裕はないがおしゃれを楽しみたいティーン、カレッジガール向きであるという表象に固着することとなったのである。

アメリカにも、老人や大人が存在し、そうした層も思い思いにファッションを楽しんでいる。そうした中で、アメリカ服飾流行の印象から「若さ」や経済的合理性のみに注目し、実際にそれらが万人向けだと語る編成され

た言説は、まさに1950年代にアメリカンスタイル批判を経由し、パリ・モードのとの抗争の中で生まれてきたのだと言える。アメリカ合衆国の象徴的な若さと、実態としての若者が結びついたことによって、1960年代のアメリカ大衆文化の受容が若者に適合していたというのも、こうした言説がもたらしたものであると考えることができる。

おわりに

『装苑』は創刊当初、ニューヨークとパリの2都市を、均等に模範として仰いでいた。戦争が泥沼化していく中で、海外情報の必要性は減じられたが、アメリカ服飾流行の中にある経済的合理性に注目することで、海外流行に関する掲載根拠の正統性を手に入れた。その結果、開戦直前まで、アメリカの流行情報は掲載され続けた。太平洋戦争が始まると、アメリカに対する否定の言説が優勢になるが、かつて学んだという記憶は、屈折した言表を生み出すこととなった。

占領期、復刊を果たした『装苑』はすぐに海外の流行に追随することは戒め、日本独自の服飾美の創造を強調した。けれども、イラストや写真の中には、アメリカ服飾流行と読まれうるものが多く掲載された。そうした分裂した方針の中で、流行を取り入れる正統性を模索する議論が続いた。1948年ごろ、流行の徹底による独創性の創造という論理を構築した『装苑』は、49年から51年にかけてアメリカ服飾流行を積極的に紹介していった。その中で、パリとアメリカの意味論的差異は戦前とは逆の奇妙なねじれを生み出した。しかし、若さというキーワードは一貫していた。

1952年に日本の独立が施行される中、「アメリカンスタイルはごめんだ」に始まる一連の記事において、「アメリカンスタイル論争」が開始された。この論争は、誌面上において、アメリカへの追随を自省させる契機となったが、母体である文化服装学院のデザイン教育へのシフトやディオール・グループの来日といった変化によって、パリ・オートクチュール志向に拍車がかかった。以後、アメリカの服飾文化は、「合理的」な既製服と象徴的な若さが現実の若者ファッションに適合するものとして、『装苑』上では表象されていくこととなった。

戦前から復興期までの『装苑』におけるアメリカ服飾流行に関する表象の推移を見てくると、フランスが「フランス」ではなくパリという焦点が中心であるのに対し、フランス国土よりも何倍も大きな国土を持つアメリ

カ合衆国の焦点は「アメリカ」で一貫しているのだ。これは、アメリカという言葉の象徴性に日本が拘泥していることを意味しているだろう。そして、その一端を成すアメリカ服飾流行をいかに解釈し、消化し、位置づけるかに『装苑』は苦心したのである。

戦後、ヨーロッパとセットだったアメリカという国を区別して、それぞれを独立した対象として見つめようとしたときに、ヨーロッパとの差異性をその「若さ」に託し、大衆の国の物質主義的合理性を、その本質としてのみ表象することとなってしまった『装苑』。その表象のポリテクスの顛末は、『装苑』のみに限ったことなのだろうか。それとも、アメリカという国の象徴性を噛み砕こうとしながら、その姿を見誤り続ける現在の我々は、『装苑』の歴史的経験を反復し続けているに過ぎないのだろうか。

註

- 1) 津田幸男・浜名恵美〔共編〕『アメリカナイゼーション 静かに進行するアメリカの文化支配』研究社 2004；若本茂樹『憧れのブロンディ 戦後日本のアメリカナイゼーション』新曜社 2007など
- 2) 小森真樹「若者雑誌と1970年代日本における「アメリカナイゼーション」の変容」『出版研究』2011などが代表的であるが、その前史に関しては言及されていない。
- 3) 杉本正幸「創刊の辞」『装苑』（1936-4）。
- 4) 高橋知子「装苑における欧米ファッション情報の受容について 1936年から1959年」『愛知学泉大学研究論集』（36），153-162, 2001
- 5) 『装苑』（1938-6）
- 6) 館林一也「スマートな女性を創作するものは何か？」『装苑』（1937-2）
- 7) 1873年創刊のアメリカの大衆的女性雑誌
- 8) ヘレン・ヴァレンティンという名を持つ人物で著名なのは、“seventeen”誌を立ち上げたHelen Valentineである。しかし、この翻訳の執筆者が、このValentineであることについては、調査しきれなかった。したがって、ここでは原文ママの引用の形で示すこととする。ただし、以後登場する場合は括弧を記さず表記する。
- 9) ドロシー・エドガースについては、誌面の中で開示された経歴は見当たらない。
- 10) 「今春の流行」『装苑』（1938-3）
- 11) 「洋裁界消息」『装苑』（1940-11）
- 12) 吉岡弥生「次代を負う若き女性に望む（一）」『服装文化』（1943-2）
- 13) ジョン・ダワー『容赦なき戦争』平凡社 2001



「アメリカの流行スケッチ」『装苑』（1946-7）

- 14) カール・スノウによって広まったとされる表現。1947年のクリスチャン・ディオールが発表した新作に対し、思わずこのように表現したとされる。
- 16) 遠藤政次郎「服装教育に対する要望」『装苑』（1947-1）
- 17) 目次では「紐育だより」と書かれ、控えめに表現されている。目次の「紐育」と記事タイトルの「ニューヨーク」が異なって表記されているためである。
- 18) 遠藤政次郎「婦人標準服とその指導機関」『服装文化』（1942-4）では、「今我国の婦人を見るに中年以上のものの大部分は進取確信の気象乏しく和服に執着を持ち旧殻を脱しきれない。また少壮年中堅層のものは欧米崇拜的教育を受けその精神が浸潤し欧米スタイルに憧れている。殊に服装指導の地位にある洋裁教育家の中には外尊内卑の先入感（ママ）が抜け切らず絢爛たる欧米の物質文明に心酔し、今日尚も宇内に冠絶する国体を認識せずして依然欧米依存の教育を続けんとする似非教育家が多数あることは争われぬ事実である」という部分などに、それは現れている。
- 19) 宇田川精一「アメリカの流行を垣間見て」『装苑』（1948-1）
- 20) 目次には「ニューヨーク・ファッション」として、他の記事とはやや離れた位置に配置され、目につくように強調されている。
- 21) 遠藤政次郎「年頭の辞」『装苑』（1949-1）
- 22) 池田弘子による「アメリカ便り（第2信）」『装苑』（1949-8）は、単なる流行情報ではなく滞米生活全般の情報を伝えている。「アメリカ便り（第三信）」（1949-11）で池田弘子は「インディアナ州ブルーミングトン市」に移り、「29名」の「アメリカ一流デザイナー」に「今年の流行の見透し」を聞いている。アメリカの流行とニュールックはおおよそこの時期には等価なものとなっており、池田弘子の「アメリカ便り」の連載は途中、何号かの休載を挟むものの、12月までの長期連載となった。



23)

『装苑』(1949-4)のグラビアのタイトルには、「AMERICAN STYLE」と表記がされている。これらの写真はナナ通信社やC.M.P.Eなどから提供されたもので構成されているので、実質的にアメリカンスタイルなのだが、タイトルにアメリカが明記されたのは初めてだった。『装苑』(1949-5)のカラーイラスト頁でも「ニュールックに生かすスカーフの結び方」と、タイトルの中に「ニュールック」が登場している。『装苑』(1949-6)では、グラビアに独立した「アメリカンスタイル」が8頁に渡って掲載されている。そのうち1頁は「フランスの刺繍」あてられているが、これほどまでに大々的にアメリカの服飾流行を視覚的に提示したのは初めてである。

- 24) ハリウッド女優のアイリン・ダンによる「魅力の秘訣」『装苑』(1949-9)なども、これらの記事の系列に入る。
- 25) この段落に挙げた記事はすべての『装苑』(1950-3)に掲載されている。
- 26) この時期の装苑は若者の「制服」について、検討する記事を載せていたが、それを補足するかのようになり、『装苑』(1950-6)では「ワシントンハイツ」の「エレメンタリースクール」における「お遊び時間」のスナップが掲載され、若い男女の服装のあり方を示唆する画像として読める。
- 27) シュザンヌ・テリー「フランスのデザイナーによる服装の話」『装苑』(1950-6)
- 28) 『装苑』(1950-2)は全ページ数が62ページであるが、『装苑』(1950-3)では92ページになっている。そして、『装苑』(1950-12)では112ページへと増加している。
- 29) 読書傾向の実際は、誌面だけではわからない。『装苑』の読者論については、稿を改める必要がある。

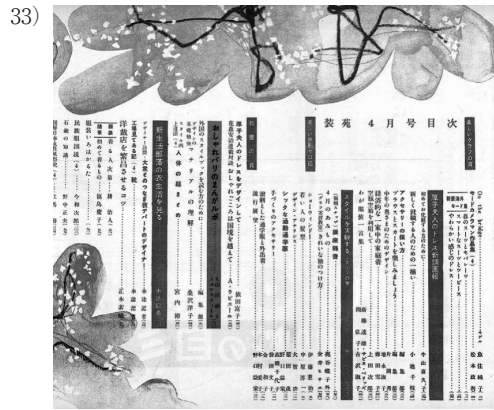


拡大→

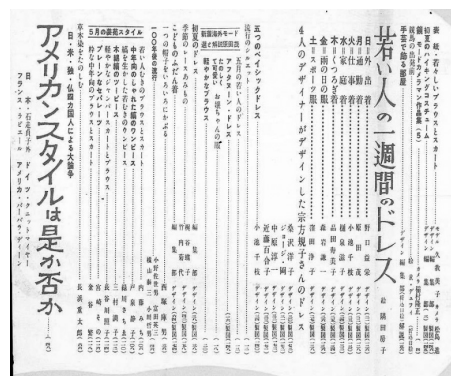
「アメリカンスタイルはごめんです」『装苑』(1952-8)

31) 野口が「「解らないからごめんだ」ではなくて、解るように努力して、その上でとり入れたい」と述べたのに対し、中原は「野口さん、そうおっしゃいますがね、解ってとり入れるということは、なかなかできるものじゃありませんよ。着る前に解りますか?」と言う風に、実践の前に理解をおくスタンスを批判している。

32) 「日・米・独・仏四カ国人による大論争 アメリカン論争は是か非か」『装苑』(1953-5)

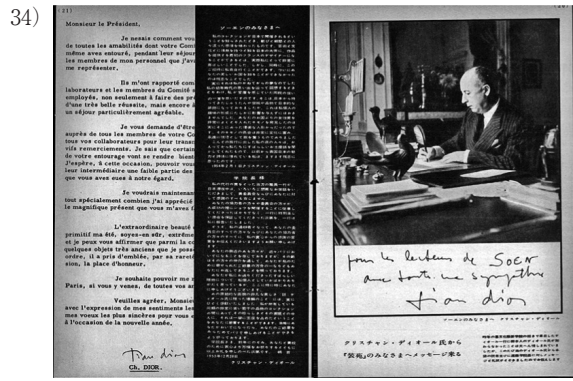


「目次」『装苑』(1953-4)



「目次」『装苑』(1953-5)

目次のクレジットに「デザイン」の表記が、几帳面になされるように変化したことがわかる。



「クリスチャン・ディオールより装苑の皆さまへ(メッセージ)『装苑』(1954-3)によると本人は来日せずに、グループとして来日したことがわかる。

35) 注目度は、『装苑』の編集構造上、目次の前半に多くのページ数を割いて掲載されるか否かによって確かめられる。徐々にアメリカ服飾流行の記事はあまり注目される場所を占めることはなくなってしまう。